

那珂川町図書館

オススメの1冊

『大きな木のような人』 いせひでこ／作 講談社【E 化】

新しい一年が始まり、気が付けばあっという間に三月。三月は“弥生”という別の名前がありますが、皆さんはなぜ弥生なのかご存知ですか？弥生には「ますます生(お)いのびる」という意味があり、草木がますます生いのびる月「草木(くさき)弥生(いやおい)月(づき)」を略して、弥生になったといわれています。(参考:『年中行事』 新谷 尚紀／監修 ポプラ社【R031ポプ】)

今回はそんな弥生にぴったりの『大きな木のような人』という絵本をご紹介します。

いせひでこさん作の『大きな木のような人』の舞台はパリの植物園。ここで植物の研究をしている“先生”はある日、園内で見知らぬ女の子と出会います。その子は大きなキャンバスを抱え、立ち入り禁止の場所に入ったり、彫像の上に登ったり…。いつも他の職員に怒られていました。そしてとうとうある日、一本の花を引き抜いてしまいます。

「このひまわりがかってにぬけたのよ！」と言う女の子に、先生は声をかけます。女の子の名はさえら。おじいちゃんのおたんじょうびプレゼントにしたかったと黄色い花を握りしめていましたが、それは探していたひまわりではありませんでした。先生はさえらに植物園にいる様々な木々を紹介します。老いた切り株から新しい枝をのぼすひこばえ、400歳のアカシアの木、3300万年前の木の化石…。先生の研究室へ招かれたさえらは、ひまわりの種をもらい育てることになりました。

それから毎日さえらは植物園を訪れ、先生から様々なことを教わります。怒られてばかりだったさえらは、気がつけば植物園の立派な一員になっていました。

先生と出会い、様々なことを学んださえら。しかし出会いがあれば別れもあります。夏が終わり、さえらが日本に帰る日が決まったのです…。

冷たい雨の中、ひこばえに傘をさすさえら。植物を見守る先生の温かなまなざし。いせひでこさんの優しい絵が、2人が過ごした日々を描いています。

そして二人を見守るのは、樹齢250年のプラタナス。ページをめくるとに瑞々しい木々の感触が感じられる絵本です。

続編『まつり』では日本に帰ったさえらと、世界中を旅して回った先生のお話を読むことができます。また講談社出版文化賞絵本賞を受賞した『ルリユールおじさん』は、『大きな木のような人』に登場したあるキャラクターのお話です。ぜひ、こちらも読んでみてください。

那珂川町図書館(たいこ)